

『オセロー』における結婚の価値観の齟齬

鍛 冶 佳 穂

序 論

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare) の戯曲『オセロー』 (*Othello*) の主人公オセローは、劇の終幕にて、自らを「愚かに、しかしあまりに深く愛した者 (one that loved not wisely, but too well)」(5.2.343)、「容易く嫉妬に駆られぬ性質でありながら、扇動され平静を失った者 (one not easily jealous, but being wrought, / Perplexed in the extreme)」(344-45) と評する⁽¹⁾。恋愛・結婚に関する女性の権利や自由が当然のことと認識されている現代の価値観からは、不貞を理由に妻を殺害したオセローが、深い愛情や嫉妬深くない性質の持ち主であるとは思えず、この台詞は虚しい自己弁護としか映らない。しかし、本作が書かれた初期近代の英国における結婚観に着目すると、当時の観客にとってのオセローは、偽善者としては片付けられない人物であり得た可能性が浮かび上がってくる。本稿では、当時の英国の結婚に関する価値観と、オセローのデズデモーナ殺害との関わりを論じる。その上で、オセローへの共感を促すシェイクスピアの手法についても考察したい。

第一章

初期近代は、結婚に対する見方の転換期であった。結婚は中世までは肉欲と結びつけられていたが、この時代には、宗教的観点から結婚が賞賛されるようになっていた。結婚生活の不和は悪徳と見做され (Batt bk.1: 5^r)、相互の愛情に根差した幸福な家庭を築くことが敬虔な信徒の務めと考えられるようになった。それに伴って、男性は妻を半身として愛し、できる限り妻の要望を叶えてやれるよう力を尽くさねばならないとされた (Gouge 350-354, 358-67; James I 80-82)。しかし一方で、古来より続く父権制的結婚観も失われてはいなかった。あらゆる指南書で、夫の支配と妻の服従の重要性が強調された (Batt bk.1: 5^r; Gouge 353-56; James I 81-82)。例えばエドモンド・ティルニー (Edmund Tilney) は、妻から個人的な意思や欲望を取り去ることを推奨した (qtd. in Newman 27)。妻の支配に失敗した男性は厳しい非難に晒された。打算から愛情無き結婚をしたペトルーキオが妻の支配に成功する一方、純粋な愛情によって結ばれたルーセンショーは妻を従わせられず、「かかあ天下」となる未来が仄めかされる『じゃじゃ馬ならし』 (*The*

Taming of the Shrew) の劇中劇は、シェイクスピアがこうした齟齬を看破し、作中で揶揄した好例と言える。

結婚に関する理想像の齟齬はそれだけではなかった。当時の言説では家庭はしばしば教会や国家に喩えられ、家庭を支配する能力のない者は、国家に貢献するという家庭の外での務めを果たすこともできないと考えられた。そのため、妻を支配できていないと見做された男性は地位を失うことがあった⁽²⁾。また、この時代には、妻が不道徳な行いに手を染めた場合、その原因は夫の不道徳な行いにあるという主張が度々なされた。例えばデジデリウス・エラスムス (Desiderius Erasmus) は、悪妻を得るのは悪い夫だけで、良い夫は悪妻をも改心させると主張した (141)。ゲージもまた、男性が悪妻を持つのは当人の不徳のためだと述べている (359)。加えて、特に庶民の間では、妻の不貞は夫の性的能力の欠如に帰されることも多かった。バラッドには妻の不貞と夫の性的能力の欠如を関連付けて揶揄する内容のものが多くある (Evans 314-15; Foyster 67-68)。しかし現実には、当然ながら優れた職務能力を有する男性や道徳的な男性、性的能力を備えた男性が必ずしも貞淑で従順な妻を持つとは限らなかった⁽³⁾。トマス・ワイソーン (Thomas Whythorne) は、妻の不貞が周知された場合にその夫が被る職務・名誉の喪失とその不当性を皮肉っている (26)。

妻の不貞に遭った男性には、その他にも理想の破綻した現実が待ち受けていた。妻の裏切りを知らながら行動を起こさない男性 (wittol) は、最も軽蔑された⁽⁴⁾。特に紳士階級の男性は、性急はもちろん、結論に辿り着かない熟考や、結論が出ていながら行動に移さない不断も避けねばならなかった (Kelso, *Doctrine of the English Gentleman* 79)⁽⁵⁾。嫉妬もまた避けなければならない悪徳であった。つまり、男性には行動なき熟考も嫉妬も許されなかったために、一度妻への疑惑が芽生えたならば、不貞か貞淑を示す証拠を掴まなければならなかった。そして証拠を得た暁には、目に見える形で具体的な行動を起こす必要があった。美德の証明には、周囲の承認が不可欠だったのである。モラリストらは、妻の不貞が明らかな場合、寝台を共にしないか、裁判を起こすことを推奨した。しかし実際には、寝台の分離は傍目に “wittol” と違いがない上、一度道徳的規範から逸脱した女性は何度も罪を繰り返すと考えられがちであったため (Foyster 170)、嫉妬や嘲りと不可分であった。また、妻の不貞に対して裁判を起こすのは、家庭の支配権を他者に委ねる行為であった (Foyster 198)。さらに裁判所には娯楽を求めて市民が押し寄せていたため (Kornstein 131)、裁判は恥をより広範に知らしめることを意味した。なお悪いことには、裁判で卓床離婚が成立しても、英国では再婚が認可されておらず、失った支配権を取り戻す手立てはなかった。妻の不貞を疑うシェイクスピアの登場人物のうち、王という特殊な立場にあるレオンティーズを除いては誰一人法に訴えないことにも領ける⁽⁶⁾。ワイソーンは周囲に知られないよう密かに妻に改心を説くことを勧めているが (26)、これもまた “wittol” と違いがなく、周囲に知られれば嘲りや地位の喪失に繋がる。即ち、妻の不義にあつては、男性は何らかの行動を

起こさねばならず、しかしいずれの行動を取ったとしても理想に反するとの誹りを免れ得なかった。

以上のような妻の不道德の原因を夫の不道德に見る思想や、「寝取られ亭主」のジレンマは、男性の不安を煽り立て、妻への不寛容を助長したであろう。当時の英国では、妻の貞操に対する第三者からの中傷は、それだけで夫婦関係を揺るがし、諍いを招くのに十分であったという (Foyster 153-56)。『シンベリン』(*Cymbeline*) において立派な英国人として描かれるポステュマスでさえ、イアーキモーに妻の腕輪を見せられただけで不貞を信じ込んでしまうのも、こうした世情を反映してのことだろう。また、この時代に顕著であった夫婦間の愛情を宗教的観点から賞賛する風潮は、不貞を倫理に悖る重罪とする見方を生んだ⁽⁷⁾。フアン・ルイス・ヴィヴェス (Juan Luis Vives) は、既婚女性の不貞は未婚女性の場合より重大であるとし、神、夫、子、父母兄弟、親類、友人、法、国に対する罪と見做している (bk.2, ch.3)。説教や指南書では、夫への服従は神が女性に課した義務であり、この義務の遂行によって女性は魂の救いを得られるのだと説かれた (Keeble 143; Kelso, *Doctrine for the lady* 120)。こうした背景の下、命より貞節を重んじる女性の姿が理想像として提示された。シェイクスピアの物語詩『ルークリース陵辱』(*The Rape of Lucrece*) でも、有徳の貴婦人ルークリースは、ターキンに強いられた意に沿わぬ姦通を罪と見做して自害する。語り手はルークリースに同情的ではあるが、あくまでルークリースが進んでターキンと関係を持ったわけではないことが前提となっている。また前述のように、美德は周囲に認められて初めて美德たり得たため、姦通の罪を着せられたハーマイオニやイノジェンは、汚名に耐えるくらいならば命を手放してしまいたいと口にする。現実の女性たちの多くもこうした価値観を内面化していた。とあるヨークシャーの女性は、中傷によって貞節を穢された女性の話を聞き及び、「(そのような中傷よりは) 命を取られた方がましだっただろうに (they might as well take her life as her good name from her)」と同情したという (Ingram 165)。

第二章

ここからは、以上の背景を踏まえた上で、オセローの言動を再考してみたい。イアーゴという第三者によって妻の不貞に関する疑惑を告げられた以上、オセローは性急、熟考、“wittol” のいづれも避け、すぐさま証拠を得なければならない。そこでオセローはイアーゴに対し、「私は疑う前に見る、疑えば証拠を得る、そして証拠を得れば、選択肢は二つに一つ。愛を棄てるか、嫉妬を棄てるかだ! (I'll see before I doubt; when I doubt, prove; / And, on the proof, there is no more but this; / Away at once with love or jealousy!)」(3.3.193-95) と宣言する。ハンカチの喪失は、不十分な証拠として、オセローの理性の欠如を示す例のように思われるかもしれない⁽⁸⁾。しかし、熟考や“wittol” に陥らないうちに証拠を得ねばならないというこの焦りが、イアーゴの提示する「証拠」を信じ込む大きな要因となったと考えられる。デズデモナーがそれまでずっ

と「肌身離さず、キスしたり話しかけたりして (she so loves the token ... / That she reserves it evermore about her / To kiss and talk to)」(3.3.296-98) 大切にしていたハンカチを、イアーゴが疑惑を吹き込んだ頃合いに偶然落としたことは、証拠を得なければならないオセローにとって大きな不運であった。また、キャシオーを復職させたいデズデモーナが、「主人には休む暇も与えません、承知するまで眠らせないし、根負けするまで話し続けます。寝床は教室、食事のテーブルは懺悔台になるわ (My lord shall never rest, I'll watch him tame and talk him out of patience; His bed shall seem a school, his board a shrift)」(3.3.22-24) とオセローを「躰け」ようとしたことも重要である。ここでデズデモーナは、配偶者を躰けるという夫の役割⁽⁹⁾と、教師・神父という当時の男性の役割を負おうとしているのだ。そしてオセローは、自分の意向とは異なる妻の願いを聞き入れる。この選択は、妻に献身し願いを聞き入れることを求める結婚の理想の実現と言えるが、同時に、夫による妻の意思の完全な支配という理想には反している。デズデモーナは支配する「男性」の、オセローは服従する「女性」の役割を引き受けることになるのである⁽¹⁰⁾。当時のバラッドでは、不貞を働く女性は「がみがみ女」であるというのがお決まりのイメージであったが、「がみがみ女」は男性の役割を負って主人となり、夫は皿洗いや料理といった女性の役割を果たすとされた (Foyster 104)。つまり夫婦間における男女の役割の逆転は、不貞と関連付いていたのだ。結婚の理想像の齟齬がもたらしたこの役割の逆転も、イアーゴが提示する偽の証拠の説得力を増加させたはずである。なお、デズデモーナに対して献身的であるはずのエミリアが、デズデモーナがこれほど大切にしている事実を知りながらハンカチを盗んだ背景にも、結婚の理想の影響が見られる。エミリアは自分の意思を夫イアーゴに服従させて結婚の理想に従うことで、イアーゴからの深い愛情が得られると思い込んでいたのだろう。

こうして「証拠」を得ると、オセローはたちまち「寝取られ亭主」のジレンマに陥る。寝台の分離、裁判、説得のいずれの選択肢を選ぼうと、誹りは免れられないのである。この八方塞がりの状況から逃れるために、オセローは、デズデモーナをしばしば「妻ではない女」と同一視された娼婦⁽¹¹⁾として扱い、三幕三場でイアーゴと結婚の誓いを思わせるやりとりを交わして「象徴的な結婚」(大橋 119)を行う。この時代には、召使いと妻の理想像はきわめて似通っていた (Kelso, *Doctrine for the lady* 115)。主人／夫は神やキリストに喩えられ、召使／妻は、主人／夫に対する自発的な服従を求められた。そして、家庭の一員とされた召使の不従順は、妻の不従順が夫の恥となるのと同様に家長の恥となった (Kelso, *Doctrine for the lady* 95-96; Neill 162-64, 169-72; Foyster 87-91)。ジェームズ一世の「召使を選ぶように妻を選べ (remember to choose your Wife as I aduised you to choose your seruant)」(79) という訓戒は、この類似を裏付けている。また、ニールが指摘しているように、社会的な上下関係はしばしば主人と召使の関係と重ねて捉えられた。実際、一幕一場でイアーゴはオセローとの関係を主従関係に喩えている (1.1.42-65)。オセローとイアーゴが交わす結婚の誓いを思わせる台詞に続いて、デズデモーナの「旦那

様って誰のこと？ (Who is thy lord?)」という問いにエミリアが「貴女の旦那様ですよ (He that is yours)」と返答する四幕二場のやりとり (4.2.101-02) を聞いた観客は、これらの役割の近似をより強く意識しただろう (Neill 161-64, 170)。つまりオセローは、忠実な部下／召使という妻に求められる理想の体現と見えるイアーゴとの「結婚」によって、妻の支配という理想を実現し、「寝取られ亭主」のジレンマを解消しようとしているのだ。

シェイクスピアは、デズデモーナの娼婦化が、当時の規範から見て過度に不条理なものとならないよう、様々な工夫を凝らしている。先述のように、この時代には女性の不道德は夫の側の職務能力の不足や不道德に帰されることが多かった。しかし、オセローは、職務面ではヴェニス中の人々が認めるほどに優秀な指揮官で、道德面に関しても、敵対するイアーゴでさえもが認めるほどに理想的な夫として描かれている。となれば、己の欲望のために非のない夫を裏切ったとされるデズデモーナは、この時代の通常の道德規範から逸脱した娼婦に等しい女性ということになる。むしろオセローとデズデモーナの間の年齢差は、観客の共感がある程度減じた可能性が高い。というのも、先述のように、妻の不貞は夫の性的不能に関連付けられる場合も多く、性的不能は老齢の男性に起こりがちだと考えられていたからである。当時の劇場では、若い女性に熱を上げる老人が滑稽に描かれ嘲笑の的ともなっていた。しかし、劇中でオセローの性的不能は示唆されていない。さらに、現実には、女性が夫の性的能力に対する不満を表明した場合、厳しい批判に晒されるケースが極めて多かった (Foyster 168; McLaren 70)。当時の道德観では、女性の愛情は精神的なものでなくてはならなかったのである⁽¹²⁾。また、オセローは劇場で嘲笑された好色な老人の定型とは異なり、若い女性を追い回す滑稽な役回りでもなければ、相手の意思を顧みずに結婚を強いるわけでもない。むしろ、「[[彼女は] こう言いました、もし私を愛するご友人をお持ちなら、その人に今のお話を教えてあげるだけでいい、それが求婚の言葉になる、と (And [she] bade me, if I had a friend that love her, / I should but teach him how to tell my story / And that would woo her)』 (1.3.164-66) などの台詞からは、デズデモーナが積極的に愛情を示していたことが分かる。さらに前述のように、夫婦間の愛情の神聖視は、不貞を倫理に悖る重罪として扱う風潮を生んでいた。従って当時の道德観に照らした場合、オセローとの結婚が互いの愛情と合意によるものである以上、仮に不義が真実であれば、オセローとの年齢差が理由であったとしても、デズデモーナは欲望のために神聖な結婚を穢したことになる。即ちイアーゴがロダリーゴの情欲を煽るために語る、娼婦を思わせる「好色なヴェニス人女性」としてのデズデモーナ像に等しい存在と見做されるのである。

ハンカチの喪失もまた、デズデモーナと娼婦の同一視を強めている。白地に赤の縫い取りがなされたこのハンカチと初夜のシーツの関連はしばしば指摘されるが⁽¹³⁾、赤と白という色合いは白い頬に差す赤みを連想させるため、恥じらいと美しさ (fair) の象徴でもあった。例えば『ルークリース陵辱』では、ルークリースの美しさ (fair) と、貞節の証とされた恥じらいという二つ

の美德が、白と赤の二色によって象徴されている (50-77)。故にハンカチの喪失は、当時の色彩観における道徳的な「白さ」を思わせる美しさ (fair) と恥じらいの喪失を連想させ、「自分自身や他人の名誉を平気で傷つける恥じらいのない女性」(Foyster 170) と見做された娼婦とデズデモーナを結びつけるのである。娼婦であるビアンカがこのハンカチをキャシオーに突き返す場面は、ハンカチ＝道徳と恥じらいというこの図式を強化する。同時に、同様にハンカチをキャシオーに手渡したとされるデズデモーナの姿と娼婦ビアンカの姿が重なるのである。

ところが、イアーゴとの象徴的な結婚やデズデモーナの娼婦化は、オセローを「寝取られ亭主」のジレンマから解放する一方で、新たな問題を生む。当時の英国では、娼婦との交わりは不道徳とされていた。「女郎屋通い (whoremonger)」は「寝取られ亭主 (cuckold)」と同様に男性の名誉を傷つける汚名であった (Gowing 29)。イアーゴが「妻」でデズデモーナが娼婦であるなら、デズデモーナへの愛は、結婚の理想に適った妻に対するものではなく、娼婦に対する肉欲に等しいものになってしまう。故にオセローは、「お前の目に宿る魔力は消えた (Forth of my heart those charms, thine eyes, are blotted)」(5.1.36) という台詞に表れているように、デズデモーナとの関係を魔女とその魔術の被害者の関係に置き換えて、再び不道徳の汚名から逃れようとする⁽¹⁴⁾。

娼婦から魔女へのイメージの推移は、当時の観客にはそれほど強引とは感じられなかったはずである。シェイクスピアの時代には、娼婦は性病や悪徳を蔓延させ、男性や国家に害をなす存在と見做された。そのためか同様に身持ちが悪く、男性・国家に害を為すと信じられていた魔女と同一視されがちであった⁽¹⁵⁾。『ヘンリー六世』(Henry VI) でも、魔女ジャンヌは娼婦とも呼ばれる (Pt.1, 5.5.84)。さらに、先述のようにデズデモーナが男女の役割を逆転させることは、「秩序のひっくり返しやあべこべのイメージ」(楠 142) がつきものの魔女と彼女との結びつきを強めている。

五幕二場で、オセローはデズデモーナ殺害を、甘美な復讐ではなく果たすべき義務として捉えている。このことは一見、オセローの偽善的な性質の一端と見える。しかしこの時代には、女性にとって貞節は、魂の救いに不可欠な命より重んじるべきものだと考えられていた。さらに魔女は “the bloody book of law” (1.3.68) に則り厳しい刑に処されたが⁽¹⁶⁾、魔女であることを認めて改悛すれば魂は救われるとされた (楠 148)。こうした価値観に照らせば、貞節を穢した娼婦／魔女であるデズデモーナにとって、悔い改めた後の死はむしろ慈悲であるとオセローが考えるのもそう突飛なことではない。裁判官の役割を負ってデズデモーナに懺悔を迫るのは、当時の価値観に則り自分のみならずデズデモーナの魂を救おうとするオセローの意識の表れと言える。この場面で、デズデモーナはハーマイオニやイノジェンとは異なり、命乞いをする。皮肉にも、このことはデズデモーナが貞節より命を重んじる「不道徳な」女性である証としてオセローの確信を増したであろう。そして、別の場所で切りつけられたロダリーゴが発した「ああ、おれは悪党

だ (O, villain that I am)」という叫び声が、声だけしか聞こえていないオセローには、イアーゴが殺すはずのキャシオーの懺悔に聞こえ、デズデモナーの「あの人は裏切られた、私ももうお終い (Alas, he is betrayed, and I undone)」(5.1.29) という言葉が、「彼の秘密が暴かれてしまったなら、私ももうお終い」という罪の告白と解せる言い方であることが、オセローの「判決」の契機となる。

父権制社会の不条理や魔女裁判の欺瞞が正しく認識されるようになって久しい現代の目から見れば、オセローは偽善的な殺人者でしかない。しかし当時の結婚に関する価値観を有した／内面化した観客にとっては、仮にデズデモナーの不貞が真実であれば、オセローの言い分は不条理とは感じられなかったはずである。事実、十九世紀までの英国の法廷では、不貞を犯した妻の殺害は大目に見られることが多かったという (Foyster 184)。

第三章

さらにシェイクスピアは、各所の台詞を通してオセローへの共感を促している。例えば四幕三場で、エミリアは夫を裏切る女性の多さと、そうした行動の原因が夫の不義にあることを語る (4.3.81-98)。一見、ダブルスタンダードを指摘するフェミニズム意識の発露とも見えるこの台詞は、むしろ齟齬を来した理想論と妻の不貞が男性の社会的評判に負わせる痛手の大きさを想起させ、オセローの錯乱やデズデモナーの娼婦化・魔女化への共感を促すものだったのではないか。先述のように、オセローに能力的・道徳的落ち度はなかった。だからこそデズデモナー不貞が道に外れた裏切りと映り、不当に奪われた名誉を取り戻そうとするのである。さらに、前述のように、作中で部下と召使、召使と妻の立場の類似が強調されていることを鑑みれば、イアーゴの「誰もが主人になれるわけじゃない、だが主人誰もが忠実な召使を持てるわけでもないのさ (We cannot all be masters, nor all masters / Cannot be truly followed)」(1.1.43-44) という台詞や、上官／主人として非があるわけではないオセローに対する裏切りは、罪のない夫も妻に裏切られる可能性があるという不安を喚起したはずである。さらに、三幕三場の象徴的結婚の直後から、両者の関係においてはイアーゴが主導権を握るようになり、上官と部下の役割が逆転する。またニールによれば、当時の社会では「主を持たない男」の女性版が娼婦であったという (176)。以上のことから、上官／主人への奉仕を拒んで上官／主人と部下／召使の役割を逆転させるイアーゴと、非のない夫を裏切る妻との近似はさらに明確になる。イアーゴの裏切りによってオセローが名誉・地位・愛する妻の全てを失う点も、妻の不貞が夫にもたらす名誉・地位・夫としての立場の喪失と重なる。

全てが露見した後、イアーゴは“slave”と罵られながらも沈黙を守る。ここには、「私は職務上の義務に縛られてはいますが、奴隷さえ免れている義務は別ですよ——考えを口に出す? (though I am bound to every act of duty, I am not bound to all slaves are free to — / Utter

my thoughts?)」(3.3.138-40) という台詞が反響している。即ちこの沈黙は、召使／妻に求められる自発的な服従＝精神的服従の拒絶を意味している。ここに示されているのは、相手を隷属的立場に縛り付けることができたとしても、精神まで服従させることはできないという現実である。確かにデズデモナは、従順な妻であった。しかし、観客は劇の終幕で、召使／妻に対する完全な支配という理想の不可能性を突きつけられる。これまで観客が時に共犯となって楽しんできたイアーゴの巧妙さは、ここで召使／妻の不実を看破する困難さと二重写しになり、共犯関係は消滅する。イアーゴによって繰り返し喚起されてきた女性のセクシュアリティに対する不安が解消されないままに、劇は幕を閉じるのである。当時の男性観客にとって、オセローの悲劇は「他人事」ではなくなる。また先述のように、女性たちの多くは女性に貞節を求める結婚の理想を内面化していたから、そうした女性観客にとっても、上記のような手法は功を奏したと推測できる。

さらに、シェイクスピアはオセローへの共感を促すために、当時の英国人の多くがイタリア人に対して抱えていたコンプレックスをも利用している。当時の英国では、宮廷人の教育はマナーの中心地たるフランスかイタリアへの留学を以て完了されるのが一般的となっていた。しかし、外国人への反感と、あらゆる悪徳の代名詞として軽蔑されたニッコロ・マキャベリ (Niccolo Machiavelli) の母国というイメージが相まって、イタリア特有の優れたマナーは不誠実さと関連付けられるようになった。イタリア人は口先だけの言葉で歓心を買う術に長けた人々だという偏見が広まっていたのである。イタリア人は、長期的な計画を練った上で辛抱強く機会を待ち、恨みを抱いた相手の魂を地獄に落とすことを目的として残虐で卑劣な手段を用いて復讐を果たす、並外れて狡猾な手腕の持ち主であると考えられ、しばしば非難された⁽¹⁷⁾。当時の英国の人々の多くは、自国人はマナーという点ではイタリア人に劣るとしても、イタリア人に欠けている実直さという美点を備えていると考えていた。キース・トマス (Keith Thomas) が指摘しているように、こうした意識は、優美さには欠けるがその分誠実であると述べるヘンリー五世の求婚の言葉 (H5 5.2.132-65) にも表れている (299-301)。初期近代の著作家トマス・D・ライト (Thomas D. Wright) は、隠し立てのない英国人と、本心を隠して人心を得る術に長じたスペイン人・イタリア人を対比させている (361)。英国人は、イタリア人は自国人には理解の及ばない狡猾さや執念深さを有していると考え、だからこそ非常に恐れたのである (Bowers 51)。そして、否定的イメージは、ヴェニスにもつきまとっていた。当時の英国では、ヴェニスは性的に墮落した都市とされ、そこに住む女性たちは好色で放埒だと言われていたのである (Loomba 99-100; Hendricks 195-96)。

『オセロー』では、キャシオー、イアーゴ、デズデモナの人物像に、上記のようなイタリア人・ヴェニス人のイメージが一部反映されている。キャシオーは宮廷人に相応しい優れたマナーを身につけており、大仰な言い回しを多用する。また、娼婦ビアンカと関係を持ち、恋人のような振る舞いでビアンカの機嫌を取ろうとする一方で、イアーゴと二人きりの時には彼女を軽蔑し笑い

ものにするという二面性をも見せる。さらには、この二面性を強調するかのように、キャシオーはマキャベリの出身地として有名だったフローレンスの出身とされ、作中で二度にわたって言及される(1.1.19, 3.1.40)。二枚舌のイタリア人／フローレンス人というキャシオーの姿を垣間見た観客は、否定的なイメージを思い起こさずにはいられなかっただろう。「口の巧い非道なイタリア人／フローレンス人」を思わせるキャシオーが、デズデモナーナに対して宮廷恋愛を連想させる言葉で復讐の取り成しを嘆願する場面(3.3.8-9)は、オセローの疑いに対する観客の共感を高めたであろう。また、軍人としてあり得べき無骨さと正義に反する狡猾さを併せ持つイアーゴの複雑な人物像は、悪人の代名詞であったマキャベリや、イタリア人と同一の性質を持つとされがちであったスペイン人のイメージだけでなく、貿易・貨幣経済の街ヴェニスに蔓延する商業的狡猾さをも反映している。さらに、ヴェニス人女性として設定されるデズデモナーナは、サイプラス島上陸直後のオセロー不在の場面で、イアーゴの卑猥な言葉遊びを積極的に楽しんでいる。この光景は、当時の観客にヴェニス人女性に対する否定的なイメージを想起させたのではないか。事実、この場面は批評家の間でしばしば否定的に論じられた。ララ・ボヴィルスキー(Lala Bovilsky)は、M・R・リドリー(M. R. Redley)の次のような批評を引用し、デズデモナーナが卑猥な言葉遊びに熟練しているように見えることを理由に、舞台上に姿を見せていない時のデズデモナーナの行動に疑惑を抱くりドリーの思考回路と、デズデモナーナの不貞を疑うオセローの思考回路との類似を指摘している。

This is to many readers, and I think rightly, one of the most unsatisfactory passages in Shakespeare. To begin with it is unnatural ... then, it is distasteful to watch her engaged in a long piece of cheap backshot with Iago, and so adept at it that one wonders how much time on voyage in the same way. (38)

当時の観客の多くも、同様の疑いを抱き、オセローの嫉妬に共感を覚えた可能性は高い。「この国の気性はよく知ってましてね、ヴェニス女ってのは、火遊びを神様に見つかっても亭主にゃ絶対見せようとしない。良心があっても罪を犯さない訳じゃない、せいぜい見つからないようにやるってだけのことなんですよ(I know our country disposition well: / In Venice they do let God see the pranks / They dare not show their husbands; their best / Is not to leave't undone, but keep't known)」(3.3.204-07)というイアーゴの台詞は、オセローの他者としての弱みに付け込むものと言える。しかし、この台詞を観客席で聴いていたロンドン市民もまた、イタリア人・ヴェニス人に否定的なイメージを持つ他者だったのである⁽¹⁸⁾。

オセローの人物像もまた、重要な意味を持っている。オセローは、宮廷人らしいマナーではキャシオーに劣るものの、実直な性格の持ち主として描写されているが、このような人物像は、前述

した当時の英国人が抱いていた自国人のイメージと見事に合致している。とすれば、オセローがキャシオーと自分とを引き比べてデズデモーナの心変わりを嘆く時、或いはマキャベリの悪役であるイアーゴの口から「あのムーアはおおらかで隠し立てのない実直な性格だ、正直者に見せかけりゃそうと思い込ませられる。そうなれば鼻面掴んでどこへでも引き回せる訳だ、ロバみたいにな (The Moor is of a free and open nature / That thinks men honest that but seem to be so, / And will as tenderly be led by th' nose / As asses are)」(1.3.388-91) という台詞が語られる時、ロンドンの観客たちは、イタリア人と自国人との対比を思い起こし、オセローに共感せざるを得なかったのではないか⁽¹⁹⁾。

結 論

以上のように、オセローは、当時の英国の齟齬を来した理想論に縛られるが故にダブルバインドに陥るのである。アーロンやシャイロック、イアーキモーといった悪役とは異なり、当時の英国人にとって受容し難い価値観に基づいて行動しているわけではないのだ。むしろデズデモーナの無実を知る観客が全面的にオセローに同情したとは考えがたい。しかし、理解し難い野蛮な偽善者として完全に他者化してしまうこともまた困難だったはずである。この巧みなバランスによって、シェイクスピアは観客に結婚の価値観の齟齬を客観視させようとしたのではないか。

シェイクスピアの悲劇では、多くの場合、主人公の死後に別の英雄的人物が物語を引き継ぎ、主人公の死によって混乱する国に秩序を取り戻す⁽²⁰⁾。しかし『オセロー』にそのような人物は登場しない。悲劇の残酷な情景は、オセローと価値観を共有するヴェニス人たちの手によってカーテンで覆われ、ただ一時的に隠されるだけである。当時の作家たちに共通する、結婚の理想の齟齬から目を逸らす偽善的な態度を想起させるようなこの灰暗い結末は、当時の社会では、このような悲劇がいつでも再び起こり得ることを暗示しているように思われる。シェイクスピアは、オセローを共感の余地のある人物として描くことによって、その悲劇を通して不条理な結婚の理想像を批判しているのである。

註

- (1) 以下、本稿における『オセロー』のテキストからの引用は、全てマイケル・ニール (Michael Neill) 編のオックスフォード版に従う。
- (2) ウィリアム・グージ (William Gouge) は “the family is a seminary of the Church and commonwealth” (11) と記している。商売敵や対立する人物を陥れるためにこうした言説を利用する者も多かった。例えばウィリアム・ウール (William Eure) は、トマス・ホビー卿 (Sir Thomas Hoby) の失脚を狙って、彼に寝取られ亭主の汚名を着せてシャリパリを行ったという (Foyster 116)。
- (3) エリザベス・フォイスター (Elizabeth Foyster) は、夫に別の人間である妻の意思や欲望をコントロールするよう求める理想の実現不可能性を指摘している (75-76)。
- (4) トマス・ミドルトン (Thomas Middleton) の喜劇『チープサイドの貞淑な乙女』 (*A Chaste Maid in*

『オセロー』における結婚の価値観の齟齬

Cheapside) には、“wittol” に因んだ名を持つオールウィットという人物が登場し、妻の不貞を利用して私腹を肥やす卑劣な男として描かれている。

- (5) ハムレットが度重なる復讐の延期を恥じるのは、父親の言葉に背いているという罪悪感のためばかりではなく、行動を旨とする当時の規範のためでもあっただろう。
- (6) 神託で誤りを指摘されてなお裁判を続けるよう命じている事実からも分かるように、王であるレオンティーズは、一般的な男性とは異なり、法廷においても絶対的な権限を持っており、裁判の利用が支配権の放棄とはならないためであろう。妻の不貞が周知となった場合の損失も、一般的な男性とは異なっていたはずである。事実、レオンティーズは、不貞の影響として地位・名誉の損失ではなく、自分の命や世継ぎの正当性、妻の評判の喪失を恐れている。
- (7) ジョーン・ケリー・ガドル (Joan Kelly Gadol) が指摘しているように、中世ヨーロッパの結婚を独身に劣る選択肢とする見方は、結婚制度の外でのプラトニックな愛を肯定する宮廷恋愛の土壌となり、限定的ではあるにせよ、貴族女性のセクシュアリティを許容しうる気風をも生んだ。つまり初期近代には、女性のセクシュアリティは中世以上に抑圧されたと言える。
- (8) オセローのハンカチへの執着に対しては、さまざまな解釈がなされてきた。たとえばマイケル・C・アンドリュース (Michael C. Andrews) は、その理由をオセローの経歴に見た。またキャサリン・S・ストックホルダー (Katherine S. Stockholder) は、不確実な現実には確実性を求め具体物と抽象物を混同しがちなオセローが、ハンカチとデズデモナの愛とを混同してしまっているのだと考えた。
- (9) ニールの註を参照 (284n23)。
- (10) 『英文学』106号に掲載の拙著『『オセロー』に見る男らしさの規範の変容』を参照。
- (11) 『尺には尺を』 (*Measure for Measure*) では、既婚者でも処女でも寡婦でもない述べるマリアナに対し、ルーシオは次のように言う。「じゃあこいつは娼婦なんだろう。娼婦にゃ処女でも寡婦でも妻でもないってのがわんさというんだから (she may be a punk, for many of them are neither maid, widow, nor wife.)」(5.1.169-79)。『チープサイドの貞淑な乙女』では、そうと知らず娼婦と結婚することとなった落ちこぼれ学生ティムがやけっぱちで言う。「妻は娼婦ではない、故に貴方は誤っている (Uxor non est meretrix, ergo falacis)」(5.4.114)。娼婦もまた、ティムと結婚しさえすれば自らの貞節は証明されると述べる。また娼婦は当時の社会において、「あらゆる場所に属する、誰にも従属しない逸脱者 (an errant creature 'of here and everywhere,' owing obedience to no one)」と見做されていた (Neill 176-77)。なお、『チープサイドの貞淑な乙女』の訳出にあたっては、アラン・ブリッセンデン (Alan Brissenden) の註釈、及び小野正和訳を参考にした。
- (12) 当時の女性向けの指南書では愛情の精神的側面のみが強調され、身体的側面にはほとんど触れられなかった (Kelso, *Doctrine for the lady* 105)。
- (13) デズデモナのハンカチと初夜のシーツの関連については、ブース (Boose 362)、ニール (173)、アヤナ・トンプソン (Thompson 51) を参照されたい。
- (14) 後述のように、当時の社会では娼婦と魔女は密接に関連付けられていた。ニールの指摘によれば、ここでの“charm”は、魅力を持つものという意味だけではなく、魔力の意味をも示すものとしても解釈できる。さらにニールは、この語と作中に頻出する魔女のイメージとの関連を指摘している (365n36)。
- (15) 魔女のイメージについては『英国ルネサンスの女たち』(楠 130-72) を参照。
- (16) ニールの注釈によれば、“the bloody book of law”は魔女に適用される法であった (219n68)。
- (17) フレジソン・ボワーズ (Bowers 47-61) を参照されたい。なお、フランス人は、友人には不正直で偽善的であるものの、イタリア人とは異なり執念深くはないと考えられていた (Bowers 55-56)。
- (18) トンプソンはアーデン版のイントロダクションにおいて、当時の英国におけるヴェニス人女性のステレオタイプを想起させるこの台詞によって、イアゴがデズデモナを中傷すると同時に、オセローをヴェニスにおける他者として侮辱していることを指摘している (23)。
- (19) マシュー・ステグル (Mathew Steggle) は、ステレオタイプ通りのカトリック教徒らと対照的な正直さを

誇るオセローは、ある種、海外に滞在する英国人のように見えたかも知れないと指摘している (115)。

- (20) 例えば『ハムレット』(*Hamlet*)ではフォーティンブラスが、『マクベス』(*Macbeth*)ではマルカムが、『コロレイナス』(*Coriolanus*)ではオーフィディアスがそれに当たる。

引用文献

- Andrews, Michael C. "Honest Othello: The Handkerchief Once More." *Studies in English Literature, 1500-1900*, vol. 13, no. 2, 1973, pp. 273-84, *JSTOR*, <http://doi.org/10.2307/449739>. PDF download.
- Batt, Barthélemy. *The Christian Mans Closet Wherein Is Contained a Large Discourse of the Godly Training Vp of Children*. Translated by William Lowth, London, 1581. *Early English Books Online*, STC(2nd ed.) 1591.
- Boose, Lynda E. "Othello's Handkerchief: 'The Recognizance and Pledge of Love'." *English Literary Renaissance*, vol. 5, no. 3, 1975, pp. 360-74, *JSTOR*, www.jstor.org/stable/43446828. PDF download.
- Bovilsky, Lara. *Barbarous Play : Race on the English Renaissance Stage*. U of Minnesota P, 2008.
- Bowers, Fredson Thayer. *Elizabethan Revenge Tragedy, 1587-1642*. P. Smith, 1959.
- Erasmus, Desiderius. *Collected Works of Erasmus*. Edited by J. K. Sowards, vol. 23, U of Tront P, 1985.
- Evans, Jennifer. "'They Are Called Imperfect Men': Male Infertility and Sexual Health in Early Modern England." *Social History of Medicine*, vol. 29, no. 2, 2014, pp. 311-32, <http://doi.org/10.1093/shm/hku073>.
- Foyster, Elizabeth A. *Manhood in Early Modern England : Honour, Sex, and Marriage*. 1999. Routledge, 2014.
- . *Women and Men in History*.
- Gouge, William. *Of Domesticall Duties Eight Treatises*. London, 1622. *Early English Books Online*, STC(2nd ed.) 12119.
- Hendricks, Margo. "'The Moor of Venice,' or the Italian on the Renaissance English Stage." *Shakespearean Tragedy and Gender*, edited by Shirley Nelson Garner and Madelon Sprengnether, Indiana UP, 1996.
- Ingram, Martin. *Church Courts, Sex and Marriage in England, 1570-1640*. Cambridge UP, 1987. *Past and Present Publications*.
- James I, King of England. *Basilikon DōRon*. London, 1603. *Early English Books Online*, STC(2nd ed.) 14349.
- Kelly-Gadol, Joan. "Did Women Have a Renaissance?" *Feminism and Renaissance Studies*, edited by Lorna Hutson, Oxford UP, 1999, *Oxford Readings in Feminism*.
- Kelso, Ruth. *Doctrine for the Lady of the Renaissance*. U of Illinois P, 1956.
- . *The Doctrine of the English Gentleman in the Sixteenth Century : With a Bibliographical List of Treatises on the Gentleman and Related Subjects Published in Europe to 1625*. Peter Smith, 1964.
- Kornstein, Daniel J. "Shakespeare and the Law." *Shakespearean Criticism*, edited by Lawrence J. Trudeau, vol. 171, Gale, 2017. *Gale Literature Resource Center*, link.gale.com/apps/doc/H1420121429/LitRC?u=waseda&sid=bookmark-LitRC&xid=a9e3665b. Originally published in *Kill All the Lawyers? Shakespeare's Legal Appeal*, Princeton UP, 1994, pp. 3-21.
- McLaren, Angus. *Impotence : A Cultural History*. University of Chicago Press, 2007.
- Middleton, Thomas. *A Chaste Maid in Cheapside*. 1968. Edited by Alan Brissenden, A & C Black / W W Norton, 1991. *The New Mermaids*, Brian Gibbons.
- Neill, Michael. Introduction. *Othello, the Moor of Venice*, edited by Michael Neill, Oxford UP, 2006, pp.1-179. Oxford World's Classics.
- Newman, Karen. *Fashioning Femininity and English Renaissance Drama*. U of Chicago P, 1991. *Women in Culture and Society : A Series, edited by Catharine R. Stimpson*.
- Shakespeare, William. *Cymbeline*. Edited by Roger Warren, Oxford UP, 1998. *Oxford World's Classics*.
- . *The First Part of King Henry Vi*. Edited by Michael Hattaway, Cambridge UP, 1990. *The New*

- Cambridge Shakespeare*.
- . *Hamlet*. Edited by G. R. Hibbard, Oxford UP, 2008. *Oxford World's Classics*.
- . *King Henry V*. Edited by Andrew Gurr, Cambridge UP, 1992. *The New Cambridge Shakespeare*.
- . *Measure for Measure*. Edited by Brian Gibbons, Updated ed ed., Cambridge UP, 2006. *The New Cambridge Shakespeare*.
- . *Othello, the Moor of Venice*. Edited by Michael Neill, Oxford UP, 2006. *Oxford World's Classics*.
- . *The Poems : Venus and Adonis, the Rape of Lucrece, the Phoenix and the Turtle, the Passionate Pilgrim, a Lover's Complaint*. Edited by John Roe, Updated ed., Cambridge UP, 2006. *The New Cambridge Shakespeare*.
- . *The Taming of the Shrew*. Edited by H. J. Oliver, Oxford UP, 1998. *Oxford World's Classics*.
- . *The Winter's Tale*. Edited by Susan Snyder and Deborah T. Curren-Aquino, Cambridge UP, 2007. *The New Cambridge Shakespeare*.
- Steggle, Matthew. "New Directions: Othello, the Moor of London: Shakespeare's Black Britons." *Othello : A Critical Reader*, edited by Robert C. Evans, Bloomsbury Arden Shakespeare, 2015, pp. 103-24. *Arden Early Modern Drama Guides*.
- Stockholder, Katherine S. "Egregiously an Ass: Chance and Accident in Othello." *Studies in English Literature, 1500-1900*, vol. 13, no. 2, 1973, *JSTOR*, <http://doi.org/10.2307/449738>. PDF download.
- Thomas, Keith. *In Pursuit of Civility : Manners and Civilization in Early Modern England*. Yale UP, 2018.
- Thompson, Ayanna. Introduction. *Othello*, edited by E.A.J. Honigmann and Ayanna Thompson, Rev. ed., Bloomsbury Arden Shakespeare, 2016, pp.1-116. The Arden Shakespeare Third Series.
- Vives, Juan Luis. *A Very Frutefull and Pleasant Boke Called the Instructio[N] of a Christen Woma[N]*. Translated by Rycharde Hyrd, London, 1529. *Early English Books Online*, STC(2nd ed.) 24856.5.
- Whythorn, Thomas. *The Autography of Thomas Whythorn*. Edited by James M. Osborn, Clarendon P, 1961.
- Wright, Thomas d. *The Passions of the Minde in Generall*. London, 1604. *Early English Books Online*, STC(2nd ed.) 26040.
- 鍛冶佳穂 「『オセロー』に見る男らしさの規範の変容」『英文学』第106号、早稲田大学英文学会編、早稲田大学英文学会、2020年、1-10頁。
- 楠明子 『英国ルネサンスの女たち：シェイクスピア時代における逸脱と挑戦』、みすず書房、1999年。
- ミドルトン、トマス 『チープサイドの貞淑な乙女』、小野正和訳、早稲田大学出版部、1989年。